

# 論文における「だ」系と「である」系の 形式の混用について

黒木晶子

## 1. 研究の動機

改まった文章であるレポートや論文においては、文体<sup>(1)</sup>を揃えるよう指導されることが一般的である。また、「です・ます」体（丁寧体）と「だ・である」体（普通体）のうち、レポート・論文においては、「だ・である」体を用いることが望ましいと指導される。そして、これら二つのタイプの文体を一つのレポート・論文において混用することは望ましくないとされる<sup>(2)</sup>。

一方、普通体で括られる、「だ」と「である」という、二つのタイプの形式については、「です・ます」体と「だ・である」体との使い分けほどには、その使い分けについて指導をするということはないようである。

しかし、形式として異なる以上、「だ」と「である」の二つの形式を区別しないまま、論文では「だ・である」体を用いることが一般的であると指導することは、論文におけるこれらの形式の使われ方の実態に照らし合わせたときに、適切であるとは言えないのではないか。

このような疑問を出発点とし、本稿では、日本語で書かれた論文において「だ」と「である」がどのように使われているかということ、特に、これら二つの形式の混用に着目して調査を行い、論文における「だ」と「である」の混用の状況について明らかにしたいと考える。

## 2. 先行研究の概観および本研究の目的

### 2.1. 論文における「だ」と「である」の使われ方についての先行研究

論文における「だ」と「である」の使われ方を取り上げた先行研究は、中村(2009)を除いては、ほとんど見当たらない。

中村(2009)は、日本語で書かれた論文における「だ」と「である」の選好状況をアンケート調査によって調べた上で、それぞれの形式が論文においてあらわれやすい箇所を明らかにしている<sup>(3)</sup>。しかしながら、これらの普通体の二つの形式が混用される状況が、論文においてどの程度あるのかということについては言及していない。

### 2.2. 文章表現に関する指導書

沖森・半沢(1998)では、文体の種類として、「だ」調・「である」調(常体)と「です・ます」調・「であります」調・「でございます」調(敬体)の二つを挙げ、常体と敬体の混用は避けるべきであることを指摘している(p.16)。また、常体の中に「だ」調と「である」調の二つの形式を認めているが、それらの使い分けについては言及していない。

浜田・平尾・由井(1997)は、論文でよく使われる文の形について、「論文の文章は、手紙などと違って特定の人を読むことを前提としていないため、『です・ます』を使わずに書くのが普通である」(p.2)とする。また、「新聞では『～だ』で終わる普通体が見られるが、論文ではこの形はあまり用いられない」(p.2)とする。

石黒(2005)では、日本語の文章における丁寧体と普通体の混用の実態について紹介し、文章を書く際に文体を混用するか、統一するかは、最終的には自分の好みでよく、どちらにするべきであるとは言えないと指摘している(p.84)。しかし、「論文やレポートなど、実質的な内容だけで勝負する文章にはこの混用の文体は不向き」(p.102)であると述べている。普通体の形式である「だ」と「である」の区別に関しては言及していない。一方、石黒(2007)では、「論文の場合、『である』体で統一が基本」(p.245)と述べている。

以上のように、文章表現に関する指導書によってその述べ方に異なるところもあるが、共通するのは、レポート・論文など改まった文章においては、文体のタイプとしては普通体が統一して使われ、丁寧体と普通体の混用は避けるべきであることが指摘されていることである。普通体はさらに「だ」体と「である」体に分かれるが、これら二つのタイプにどのような使い分けがあるのか、これら異なる形式の混用が実際の論文ではどのように行われているのかということについては、詳しくは述べられていない。

### 2. 3. 本稿の目的

レポート・論文における文体の混用というと、丁寧体と普通体という括りで問題にされることが一般的であるが、同じ普通体という枠で括られる「だ」と「である」という二つの異なる形式についても、形式が異なる以上、混用という観点で見ていく必要があるのではないか。なぜなら、レポート・論文における表現指導を受ける立場からすると、使われる形式として複数の異なる形式が提示されただけでは、それらをどのように使い分けるべきか、あるいは、使い分けを気にせずに使っていいものか、迷うことがあると推察されるからである。

以上のことから、本稿では、これまで文章表現の指導の場面で、丁寧体と普通体の使い分けほどには焦点が当たって来なかった、「だ」と「である」という形式の使い分け、特に、これらの形式の混用が論文においてどのような状況であるのかということをも明らかにすることを目的とする。

## 3. 調査対象および調査方法

本稿では、『日本語教育』第140～146号<sup>(4)</sup>に掲載された論文50編について、「だ」と「である」の形式のあらわれ方を調査した。今回は、主節の文末における「だ」と「である」の形式（以下、「だ」系・「である」系の形式、とする）のあらわれ方を調査した。

なお、本稿では、上述した論文について、論文の最初から最後までではなく、論文後半の「考察」および「まとめ」の部分を調査対象とした。これらの部分

を調査対象とした理由は、今回は、できるだけ多くの異なる執筆者による論文を広く調査することがねらいであったことと、「考察」および「まとめ」の部分に「だ」系・「である」系の形式が用いられやすいと推測されたためである。ここで扱う「だ」系・「である」系の形式とは、言い切りの形である「だ」「である」の他に、「だろう」「であろう」「だろうか」「であろうか」「のだろうか」「のであろうか」という形式が含まれる。これらの形式は、書き手の断定的もしくは推量的な判断を表す形式であり、研究の概要や調査の手続きについて時系列で述べた箇所よりも、調査結果をふまえての書き手の判断が述べられる「考察」および「まとめ」の部分にあらわれやすいと考えられる。

#### 4. 「だ」系と「である」系の形式の混用のタイプ

今回調査対象とした論文 50 編のうち、主節の文末において「だ」系と「である」系の形式の混用が見られたのは 19 編であった。その混用のあらわれ方にはいくつかのタイプが見られた。

以下、「だ」系と「である」系の形式の混用のあらわれ方をタイプごとに見ていく。その際、それぞれの形式のあらわれ方をばらばらに見ていくのではなく、一つの論文において、「だ」系と「である」系とで対応する形式が混用されているのか、あるいは、「だ」系と「である」系とで対応しない形式が混用されているのか、という観点で見していきたい。

ここで言う、『だ』系と『である』系とで対応する形式とは、「だ」系の形式を「である」系の形式に置き換えても意味的に違いが生じない形式のことである。たとえば、「だ」と「である」の場合、文体的な違いがあるとしても、いずれも文末にあらわれ、書き手の断定的な判断を表すという意味に違いはない。「だろう」と「であろう」についても、同様に、事柄に対する書き手の推量的な判断を表すという意味に違いはない。

一方、『だ』系と『である』系とで対応しない形式とは、「だ」系の形式を「である」系の形式に置き換えることができない（置き換えると意味的に違いが出てしまう）形式のことである。たとえば、「だ」と「であろう」の場合、「だ」

系、「である」系という違いに加えて、書き手の断定的な判断を表すのか、あるいは、推量的な判断を表すのかという意味的な違いがある。

#### 4. 1. 「だ」系と「である」系とで対応する形式が混用されている場合

まず、「だ」系と「である」系とで対応する形式が一つの論文の中で混用されている場合である。これは、さらに、それぞれの形式が接続する要素のタイプによって2種類に分類できる。

##### 4.1.1. 「だ」系と「である」系とで対応する形式が同じタイプの要素に接続する場合

これには、「だ」系と「である」系の形式の混用が見られた論文（以下、混用論文、とする）19編のうち2編が該当した。このうち1編においては、言い切りの「だ」と「である」が混用されていた。いずれも、同じタイプの要素（モダリティ形式）に接続するものであった。

- (1) しかし実際の学習者作文データに照らしてみると、語彙の誤りのうち、「コロケーションに問題があるもの」については、読み手は文脈を利用することでかなりの程度まで意味推測が可能であり、適切な修正も容易であるようだった。（論文5…『日本語教育』140、pp.56-57）<sup>(5)</sup>
- (2) その意味で、例えば「接続詞の選択ミス」というのは意味解釈上重大な障害となるようであった。（論文5…『日本語教育』140、p.57）

(1) の場合、仮に文末に「だ」の代わりに「である」を使うと、「よう」というモダリティ形式の前に「容易である」という形容動詞の活用形「である」が来ているので、「容易であるようであった」と「である」系の形式が重なる。このため、文末に「だ」を使うことによって書き手は「である」系の形式の重複を回避したのではないかと考えられる。一方、(2) では、「よう」というモダリティ形式の前に動詞普通形（「なる」）が来ている。

また、このタイプの混用が見られた論文2編の両方において、「だろう」と「であろう」の混用が見られた。

(3) 就学前の子ども達の言語生活を豊かにするには、さまざまな創意工夫が世界中で行われる必要があるだろう。(論文42…『日本語教育』146、p.14)

(4) 自分達の作品が実際に役立ち履修単位にもなれば、取り組む意欲も高まるであろう。(論文42…『日本語教育』146、p.14)

論文42の場合、「だろう」と「であろう」がいずれも動詞普通形という同じタイプの要素に接続していることから(3)、(4)、「だろう」と「であろう」の使い分けが接続要素のタイプの違いによるものではないことがわかる。

#### 4.1.2. 「だ」系と「である」系とで対応する形式が異なるタイプの要素に接続する場合

これは、「だ」系と「である」系とで対応する形式が異なるタイプの要素に接続している場合である。これに該当する論文は混用論文19編中6編であった。このうち、5編で「だろう」と「であろう」の混用が、1編で「だ」と「である」の混用が見られた。

たとえば、論文2の場合、「だろう」は動詞普通形に接続しており(5)、一方、「であろう」は形容動詞語幹に接続している(6)。

(5) 教室活動に「相手の書いたことを再構成して話しなさい」という指示を明示的、系統的に取り入れたのは、PRの特徴といえるだろう。(論文2…『日本語教育』140、p.23)

(6) したがって、学習者に活動を指示する際に、修正や語の選択肢提供がポライトネスの脅かしでなく相手への貢献であることについて言及し、ためらいを軽減させる配慮が必要であろう。(論文2…『日本語教育』140、p.23)

また、論文32の場合、「だろう」は動詞普通形に接続しており(7)、一方、「であろう」は名詞(8)、形容動詞語幹(9)、モダリティ形式(10)に接続している。

(7) 多様な構成員がいてこそ、学びの場の可能性が広がるだろう。(論文32)

…『日本語教育』144、p.94)

(8) いわゆる「正しい日本語」をいかに効率的に教えるかに専心してきた実習生や担当教員にとっては困難な作業であろう。(論文32…『日本語教育』144、p.94)

(9) 複数の当事者の間に立ちつつ、一緒に学んでいくコーディネーターの存在が、協働的な共生社会構築に寄与する日本語教育の場には必要であろう。(論文32…『日本語教育』144、p.94)

(10) 支配・被支配の関係にないことは両者とも留意すべきであろう。(論文32…『日本語教育』144、p.94)

名詞、形容動詞語幹、モダリティ形式の場合、言い切りの形では、文末が「だ」「である」「です」となる。このうち、論文における言い切りの形としては「である」が一般的であり、したがって、まず言い切りの「である」が選択され、それとの関連で「であろう」という推量的判断を表す形式が選ばれたのであろう。

一方、動詞普通形の場合、言い切りの形では、当然ながら文末に「である」が来ることはなく、直後に「だろう」が接続したと考えられる。しかし、「広がるだろう」(7)を「広がるであろう」のように、「である」系の形式にしてもおかしくはない。そこをそうしないのは、この場合、接続要素のタイプの違いということとは異なる要因が関わっているのではないだろうか。

#### 4.2. 「だ」系と「である」系とで対応しない形式が混用されている場合

これは、「だ」系と「である」系とで対応しない形式が一つの論文の中で混用されている場合である。これは、さらに、それぞれの形式が接続する要素のタイプによって2種類に分類できる。

##### 4.2.1. 「だ」系と「である」系とで対応しない形式が同じタイプの要素に接続する場合

これは、「だ」系と「である」系とで対応しない形式が論文中で混用されており、それぞれの形式が同じタイプの要素に接続するというものである。この

タイプには混用論文 19 編中 1 編が該当した。

(11) なぜ「にとって」文に動詞述語を使用すると誤用になりやすいのだろ  
うか。(論文 22…『日本語教育』142、p.108)

(12) 一方、「私にとって」のままでは、「A」が「私」と直接関わりのある  
事柄として捉えられ、そのために違和感のある文になってしまうののであ  
る。(論文 22…『日本語教育』142、p.109)

論文 22 において「のだろうか」と「のである」が使用されているが、いず  
れも普通形に接続している。これは、いずれも元々は「のだ」という形式であ  
るので、前に普通形しか来ようがないということが関係している。

#### 4.2.2. 「だ」系と「である」系とで対応しない形式が異なるタイプの要素に接続す る場合

これは、「だ」系と「である」系とで対応しない形式が論文中で混用されて  
おり、それぞれの形式が異なるタイプの要素に接続するというものである。こ  
のタイプには混用論文 19 編中 3 編が該当した。このうち、2 編で「だろう」  
と「である」の混用が ((13)、(14))、1 編で「のうか」と「である」の混  
用が ((15)、(16)) 見られた。また、3 編とも「だ」系の形式の場合(「のう  
か」「だろう」)、接続する要素は動詞普通形であった。

(13) そして、余裕があれば、あるいは学習段階に応じて、次のことを付け  
加えていけば、より表現の幅を広げられるだろう。(論文 10…『日本語教育』  
141、p.44)

(14) 単純な文に置くと違和感が生じやすい共起関係でも、複雑な文の中  
では、構文関係を明示するという要請のもとに、多少の座りの悪さを承知の  
上で「にとって+感情形容詞」を使うという場合も見られるようである。  
(論文 10…『日本語教育』141、p.44)

(15) 以上のような研修を行うためには、日本語教育機関はどのような環境  
条件を備える必要があるだろうか。(論文 29…『日本語教育』144、p.57)



(16) もう一つ必要なのは「教育現状のメタ認知」をするための技術である。  
(論文 29…『日本語教育』144、p.56)

このタイプの場合、接続する要素のタイプによって「だ」系と「である」系の形式が使い分けられているのではなく、断定的判断であれば「である」系の形式が、推量的判断であれば「だ」系の形式が、というように、意味によって形式が選ばれていると言えるのではないか。

#### 4.2.3. 特定の表現の中で「だ」系の形式が使われている場合

混用論文 19 編のうち 8 編において、「～のではないだろうか」という、書き手の推量的判断を表す表現の中で「だ」系の形式(「だろう」)が使われていた。これら 8 編の論文では、1 編<sup>(6)</sup>を除いて、いずれも他の文末形式では「である」系が使われていたが、この推量的判断を表す表現においては、「だ」系の形式がいずれの場合も使われていた。

(17) 日本語能力が向上してきた留学生に対しては、留学生の出身国の料理や伝統芸能などを話題にしたり、それらを紹介・披露してもらうイベントを開催したりすることも、「自文化評価認知」を高める一助となるのではないだろうか。(論文 46…『日本語教育』146、p.86)

(18) 「自文化評価認知」を高める一助となるのではないであろうか。

この場合、「～のではないだろうか」の代わりに、「～のではないであろうか」という「である」系の形式を用いることも可能であると考えられる。しかし、今回調査した論文では、(18) のような例は見られなかった。

このことから、特定の表現においては、「である」系の形式よりも「だ」系の形式の方があらわれやすいということがわかる<sup>(7)</sup>。

以上をまとめると、表 1 のようになる。

表1 論文における「だ」系と「である」系の形式の混用のタイプ

「だ」系と「である」系の形式が混用されている論文 (19編)					
混用のタイプ	「だ」系と「である」系とで対応する形式が混用されている場合		「だ」系と「である」系とで対応しない形式が混用されている場合		
	同じタイプの要素に接続する場合	異なるタイプの要素に接続する場合	同じタイプの要素に接続する場合	異なるタイプの要素に接続する場合	特定の表現の中で「だ」系の形式が使われている場合
該当論文数	・「だ」と「である」…1 ・「だろう」と「であろう」…2	・「だ」と「である」…1 ・「だろう」と「であろう」…5	・「のである」と「のだろうか」…1	・「だろう」と「である」…2 ・「だろうか」と「である」…1	・「～ののではないだろうか」…8

※ 論文によっては複数の混用のタイプが見られたため、「該当論文数」の合計は混用論文の数 (19編) を上回っている。

## 5. まとめ

以上、本稿では、論文における「だ」系と「である」系の形式の混用の状況について見てきた。

今回調査対象とした論文では、文末に来る言い切りの形「だ」「である」については、混用が見られたのは1編<sup>(8)</sup>のみであり、言い切りの形については混用はまず問題にならないと言ってよい。しかしながら、他の「だ」系と「である」系の形式に関しては、同一の論文の中で混用がなされていた。そして、同一の論文内での「だ」系と「である」系の形式の使い分けは、接続する要素のタイプによってなされている場合と、接続する要素のタイプに関わらずなされている場合とがあることがわかった。

では、なぜ同一の論文内で「だ」系と「である」系の形式の混用が行われるのかというと、理由の一つには、形式の繰り返しを避けるということがあるのではないか。(1) で見たように、一文の文末において似たような形式が繰り返されることを避けるためではないか。

また、異なる文であっても、一つの論文において「だ」系と「である」系の

うち一方の系の形式ばかりが使われることは、文末が単調になるため避けたいという書き手の意識も働くのであろう。論文 32 で見られたように、接続する要素によって「だ」系の形式と「である」系の形式を使い分けたり（動詞普通形に接続する場合は「だ」系の形式を使い、名詞、形容動詞語幹、モダリティ形式に接続する場合は「である」系の形式を使う）、論文 10、29 で見られたように、接続する要素ではなく意味によって「だ」系の形式と「である」系の形式を使い分けたりする（断定的判断では「である」系の形式の「である」を使い、推量的判断では「だ」系の形式の「だろう」を使う）ことにも、重複を避けるという書き手の操作が関わっているのではないだろうか。

## 6. おわりに

以上、本稿では、論文における「だ」系と「である」系の形式の混用の状況について考察を行った。

本稿では、「だ」系と「である」系の形式が接続する要素のタイプに着目して、特に主節の文末形式について考察を行った。今後は、考察の対象とする論文数を増やすとともに、主節の文末形式だけでなく、従属節の場合についても見ていきたいと考える。

### 注

- (1) 沖森・半沢 (1998) では「文体には、大きく 2 種類あり、文章の種類に即した類型的な様式と、書き手個人に即した個性的な様式とがある」(pp.79-80) としているが、本稿で言う文体とは、沖森・半沢 (1998) の言う 2 種類の文体のうちの、「文章の種類に即した類型的な様式」のことである。
- (2) これについては、2.2 において述べる。
- (3) 中村 (2009) におけるアンケート調査の内容は、「だ」と「である」が比較的均等に混在する論文 1 編を取り上げ、その論文の文中・文末の「だ」と「である」を、全て「だ」に書き換えたもの、全て「である」に書き換えたもの、「だ」「である」を併記したものの 3 種類を調査用紙として用意し、インフォーマントにそれぞれの調査用紙における「だ」「である」の使用の適合性を答えさせるというものである。インフォーマントは、20 代から 40 代の日本語母語話者 20 名(男女各 10 名) である。調査の結果にもとづき、論文において「だ」と「である」

があらわれやすい箇所として、以下を提示している。(用例は、中村(2009)で調査対象とされている論文に見られるものを筆者が挙げた。用例中の下線も、一部を除き、筆者による。)

○「である」があらわれやすい箇所

①内容のまとまり、あるいは段落の順序構造を示す文

- ・その第一は、日本人の多くが持っている“ムラ原理”とでも呼ぶべき平等志向と集団的自治志向である。

②書き手が強調したい部分を含む文

- ・日本の企業についてしばしば指摘される“技術信仰”つまり、技術的にすぐれている製品こそが“良い”製品であるという信念なども、それと同根であろう。

③先行する内容を承ける指示詞を含む述部

- ・たとえば、次のような文明の説明図式(図1)がそれである。

④例示表現を含む文

- ・たとえば、日本は、歴史的には、近代化の一局面である産業化の後発国(ないし中発国)である。

⑤文末に一定の述定成分を要求する表現が先行する文

- ・問題は、この“ホンネ”レベルでの認識や倫理が一定普遍ではなく、“状況”に応じて変化することである。

⑥「名詞1であるという名詞2」や「名詞/ナ形容詞であると動詞」の内容節構造内

- ・日本の企業についてしばしば指摘される“技術信仰”つまり、技術的にすぐれている製品こそが“良い”製品であるという信念なども、それと同根であろう。

⑦「よう」「そう」等のモダリティ表現の後ろ

- ・同じことは、文明素相互間の関係についても言えそうである。

○「だ」があらわれやすい箇所

①文末の「だろう」

- ・おそらく、もっとも確実に言えることは、ここで言う意味の文化は、ほとんど定義上、人間が主体的に選択したり変更したりすることのできないものなことだろう。

②「だ」をその構成要素として含む文末表現

- ・おそらく“日本的民主主義”や“日本型市場経済”の諸制度は、その意味で欧米の民主主義や市場経済のそれと“相似”な文明素だと言えるのではないだろうか。

③内容節や文中で書き手や引用文の述べ手の主観性が反映される箇所

- ・このため、外国人の目から見て日本人の行動は予測不可能だと言われることがあるが、それは言いすぎないし言いがかりであって、…(中略)…日本人の行動(の変化)は、ほとんどの場合、多くの日本人以上に正

しく予測可能である。

- (4) 日本語教育学会発行の学会誌であり、2009年1月から2010年8月にかけて発行されたものである。
- (5) ( )内の論文番号は本稿で調査対象とした論文に便宜上付した番号である。以下の用例についても同様である。
- (6) この論文では、4.2.1で取り上げた混用のタイプ(「だ」系と「である」系とで対応しない形式が同じタイプの要素に接続する場合)も見られた。
- (7) 中村(2009)においても、論文において「だ」があらわれやすい箇所の一つが「『だ』をその構成要素として含む文末表現」(p.95)であることを指摘しており(本稿の注(3)参照)、その文末表現の一つとして、「～のではないだろうか」(「話者の推測的な意見表明の表現」(p.93))を挙げている。
- (8) 4.2.3の表1では、「だ」系と「である」系とで対応する形式が混用されている場合、「だ」と「である」の混用が見られる論文が、同じタイプの要素に接続する場合と異なるタイプの要素に接続する場合とで、1編ずつあるとしているが、これは同一の論文のことである。

#### 参考文献

- 石黒圭(2005)『よくわかる文章表現の技法Ⅲ 文法編』明治書院  
石黒圭(2007)『よくわかる文章表現の技法Ⅴ 文体編』明治書院  
沖森卓也・半沢幹一(1998)『日本語表現法』三省堂  
中村重穂(2009)「論文に於ける『だ』と『である』の選択条件に関する試行的考察」  
『北海道大学留学生センター紀要』第13号、pp.78-96  
野田尚史(1998)『『ていねいさ』からみた文章・談話の構造』『国語学』第194号、  
pp.89-102 国語学会  
浜田麻里・平尾得子・由井紀久子(1997)『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版  
益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版

(本学准教授)